南三小

教育目標
よく考える子ども
心も体もたくましい子ども
仲良く助けあう子ども

１２月号

町田市立南第三小学校
令和６年　１１月　２９日
校長　　工藤　　成

ＵＲＬ　https://www11.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=1310182

音楽の力

校長　　工藤　成

６年「ユタと不思議な仲間たち」

５年「銀河鉄道の夜」

ポインセチアの花が街を彩る季節となりました。早くも３週間が経ちましたが、学芸会の折には子供たちに温かな励ましをいただきました。ありがとうございました。保護者アンケートの感想にもありましたが、各学年の実態に応じた発表内容は見応えがありました。同時に歌や合奏も大変素晴らしいものでした。物語の魅力を引き出す重要な役割を果たしていました。改めて音楽のもつ力に圧倒されました。

さて昨年９月、ミサイルが飛来するウクライナ・オデーサの舞台でオペラを指揮した日本人マエストロがいます。吉田 裕史（ひろふみ）氏です。氏はコロナ禍を通して、音楽は人間にとって不要不急なものではなく、むしろ必要緊急のものであると確信していました。演奏開始直前、観客に向かって挨拶しようとした氏の目に飛び込んできたのは、カーキ色の軍服を着た兵士たちでした。一時帰宅し、家族と一緒に歌劇場に来ていたのです。翌日には部隊に戻らなければならない。にもかかわらず家族との大切な時間にオペラを聴きに来た。兵士たちは明日死ぬかもしれないという思いを抱え、オペラを聴きに来てくれている。彼らは今を必死に生きようとしている。そう思うと、吉田氏は我を失うほど熱くなって指揮棒を振りました。演奏終了後、2、3人の兵士が笑顔で次のように語ったそうです。「自分たちは明日戦場に戻ります。最後に素晴らしい演奏が聴けて、本当によかった。子供や孫たちには、平和に暮らし、音楽を楽しめるようにしてやりたい。だから自分たちは戦場で頑張ります。」と。

ところで今年も残すところ、ひと月です。年末と言えば誰もが耳にするクリスマスソングと並んで聞こえてくるのがいわゆる「第九」のメロディー。ベートーベンの交響曲第９番です。音楽の都オーストリア・ウィーンでの初演から今年でちょうど200年になりました。当時のクラシック音楽界では、人間の声で歌い上げた第４楽章は「禁じ手」と言われるほど斬新だったそうです。それもそのはず、もともと交響曲は楽器を使うオーケストラによって演奏される曲を示すものでした。ところが独唱が叫び、会場総立ちの合唱を取り入れた「歓喜の歌」は、後の作曲家に大きな影響を与え、交響曲というジャンルを再定義するモデルになったとも伝えられます。そんな「第九」には、平和を願う気持ち、人々を結び付けるメッセージ、勇気を鼓舞する強力なアピールなどが込められています。原爆投下から１年余りを経た1946年暮れ、広島の市街地の多くは依然、焦土のままでした。雪が舞う冬空の下、ある喫茶店でレコードによるコンサートが行われました。噂を聞き付けた市民が詰め掛け、涙を流して聞き入ったのが「第九」でした。疲れ果てた人々の心をどれほど癒（いや）し、慰め、希望を与えたことでしょう。やはり音楽には力があります。

休み時間、校庭からはボール遊びや鬼ごっこをしている子供たちの楽しそうな声が寒風に乗って届いてきます。廊下や階段からは教室移動をする子供たちの挨拶が響き渡ります。１階からはオルガンの音に合わせた元気な歌声がします。３階を通ると話し合いの声が耳に入ってきます。体育館からは「がんばれー」と甲高い声援が繰り返し聞こえてきます。校庭や校舎内から聞こえてくる子供たちの声には命の輝き、伸びゆく未来を感じます。学校にとっては子供の声こそが力強い音楽です。２学期もまとめの時期になりました。今学期の生活を振り返り、成長した子供の姿を見出し、努力の成果を認めていただきたいと存じます。そして今まで以上に学校と御家庭が連携を密にしながら、子供の伸びようとする意欲を支援していきたいと思います。